

東日本大震災の被災地の子どもたちに 図書カードを送る活動続ける

おやま たくや
小山卓也さん(85)

自身の描いた絵を表紙にしたノートや本の販売益金で図書カードを送ってきた。元高校教諭で、盛岡一高の教え子と企画したのがきっかけ。ブック・エント・ドリーム・プロジェクトと題した活動は10年を迎え、11月に釜石市で節目の絵画展を開いた。

ひと

その絵画展での出来事が忘れられない。夕暮れとコバルトブルーの海、ひよこりひよつた

ん島のモデルと

される蓬莱島を描いた油絵「大槌湾の夕映え」。その前で立ち止まった大槌町の男性がつぶやいた。「もうこの風景はないです」

震災後に海の色が変わり、防波堤で港の姿が覆い隠されたという。「思いがけず」風景遺産を残せた。この奇跡に感謝したい」と思いがこみ上げた。「目だけじゃない心象風景を描きたい」と長年続けてきた。大槌高在職時も休日は浜辺でスケッチにふけた。

子どもの頃から絵を描いたりが好きだった。感じたことをすぐにメモする癖は今も変わらない。退職後は盛岡市の自宅にアトリエ鴉庵(あづかあん)を構え「絵つこを描いている時が一番心がほっとする」と筆を握り続ける。彫り物も趣味で、自作の印鑑を愛用する。同市出身。

(報道部・山村あゆ)

